思考の羅針盤

同じ種類の動物でも家畜と野生動物では脳の大きさが違う、という研究がある。不確実性に向き合わなければ生物として弱くなってしまう。
デヴィト・グレーバーは「官僚制のユートピア」で、それぞれの善悪の判断や損得の勘定で動けば、規制でがんじがらめにしなくても社会は回るという。
実際、法定速度やルールを完璧に守っていたら、交通は回らない。ここではスピードを上げようとか、ここは危険だからスピードを落とそうとか、融通して回している。

ルールを適度に無視して、自分たちで考えて何かをしている状態は、交通だけでなく、社会の隅々にあり、本来その上に秩序が出来ているはずである。そのことを忘れて、細かいルールを作って制度化しょうとすると、一つの制度を作るとまた別の制度を作らなければならなくなる。

膨大な試行錯誤を経て、均衡点に落ち着いているとすれば、資本主義という強固なシステムは進化の淘汰に生き残ったと言えるのだろうか。
この１００年間ほど、たまたまうまくいっただけという考え方が支配的である。資本主義は、人の欲求に基づいて設計された制度である。

アダム・スミスは欲求を越えた社会性として、義務や道徳の確立する必要があるとしている。個人の自己愛や利益の追求だけでなく、共感が重要だと説いている。
義務や道徳、共感が重要で、個人の利己的な欲求による需給バランスはあ、その上で生じるとしているが、現代では、後者だけが切り取られている。
人間は進化の過程で、不要な機能は排除される。現代社会では不要と思われる機能、経済的成功につながらない能力や機能を排除していくと、社会システムが変わった時、不具合が起こるかもしれない。

経営学の組織論でも、理念や企業文化をＤＮＡとして継承したり、テキストとして正確にコピーしていくことが絶対善だと思われている。しかし、コピーの過程でランダムに起こるエラーこそが進化をもたらすなら、意図的にエラーを起こすプロセスの設計が必要になる。
日本社会では無謬性（誤りのなさ）が重要視されていて、ミスやエラーを忌避するが、それが社会の閉塞感を招いているように思える。
会社は何に関係するかわからないことばかりやっていたら倒産する。しかし短期的な利益とは結びつくことだけはなく、遊びや余白を残しておかなければ、長期的には衰退してしまう。

今後は、小規模な事業がローカルに分散する中、どのようなビジネスモデルで対応していくか、企業レベルでも発想の転換が求められるている。成長という命題を背負い続ける、売上、時価総額にせよ、一定の成長を続けるなら、どこかで限界が来るはずである。今後は普遍性の低い、すなわち希少な問題を個別に解決できるような小規模の集団や組織が必要とされるのではないか。